

環境と表現への試論 (A)

—環境・環境問題・人間の生—

水 田 一 征*

(平成 7 年 9 月 28 日受理)

Ein deskriptiver Versuch an der Um-Welt und den Ausdrücke, (A)

Kazuyuki MIZUTA

(Received Sept. 28, 1995)

Auszug:

Sogenannte Umweltproblematik und alle Massnahmen zum Umweltschutz heutzutage sind besonders das aufmerksamste Thema des Wendepunkt des modernen Leben zum Umwelt-Zeitalter geworden.

Um die Struktur der Umwelt der Industrialisierte Zeitalter heute näher zu analysieren, ist es sinnvoll, erstens phänomenologisch die Struktur der originellen, vom Menschen gesehen lebendigen Umwelt, deren Begriff ursprünglich aus der Biologie stammt und mehrdeutig ist, deutlich darzustellen und im einzelnen zu betrachten. Danach werde es klar, die moderne, wissenschaftliche Denkweise gegen den Umweltproblemen unvermeidlich nicht gleich mit der Umweltgestaltung nach der kommenden Zeit als die "Umwelt-Idee" der unseren Zukunft identifizieren zu können.

Dabei und besonders hier der "Um-welt" Begriff von Ortega y Gasset spielt eine wichtige Rolle als Leitfaden für ein phänomenologisch-strukturell-analytisches Verständnis davon, und zwar die Doppel-Bedeutungen von den zeit-räumischen Offenheit und Geschlossenheit im Gegensatz zu dem Grenze-Vorhaben der allgemeinen Räumen und Plätzen und zu der Grenzlosigkeit der Welt. Das "In-der-Umwelt-Leben" der Menschen bedeutet nach wie vor nicht den unbewussten Zeitlauf des Alltags-lebens ohne bewusste Zukunft-Idee, sondern eigentlich das "In-der-Geschichte-Sein" des ernsthaften "In-dem-Tag-Sein" mit der Zukunft, mit Hilfe von den Ausdrücke.

Schlüsselwörter: Umwelt, Umweltproblematik, menschliches Leben, Phänomen, Ausdruck

§ I) は じ め に

環境問題の顕在化と共に、「機械と進歩の時代」から「環境の時代」へのパラダイムシフトを、人間と自然との関係変換を、巷間、言われている。それは何を意味し、どの様に実現され得るのだろうか？

つまりは、環境の未来の話になる。「環境の時代」と言う表記にはどこか、待ち受けていたものを迎えるポジティブな響きが、環境問題に強意があればネガティブな彩りを帯びる。後者には、具体的には、空気・大地・水の汚染、砂漠化、オゾンホール、熱帯雨林、炭酸ガスと温暖化、水問題、エネルギー問題、食料問

* 広島工業大学環境学部環境デザイン学科

題、人口問題、南北問題、精神の荒廃の問題、等、いわゆる環境を巡る直接・間接の要素から全体に渡る問題・危機がある。

環境が、その本質的な思惟・思索をするまでもなく、いわゆる環境問題が起こったことでも、つまり人間の生存に関わる問題としても、見据えられている。言葉を代えれば、人間無しでは起こり得ない人間的事象である。しかも、環境と人間は、環境問題が指示するような外在的關係ではなく、本性、相互内在的なものであることを、予め言って置きたい。論は、環境問題を眼差している地平と、本来の意味の環境が生成する地平との対比的差異の上で運ばれ、結果、未来の時空への可能性……焦点は環境危機の回避と表現としての環境デザインの能力の認識……に及ぶつもりである。

『人間の肉体や産業施設の活動に必要なとされる技術的要因——例えば、食料、電力、天然資源の供給——だけが、最適人口規模を決定する際に考慮しなければならぬ要因なのではない。人間生命を維持するためにそれと同じくらい重要なのは、静けさ、プライバシー、独立、独創性、そしてオープン・スペースへの欲求を満足させることが可能な環境なのである。これらは飾り物でも贅沢品でもなく、真の生物学的必需品である』とルネ・ジュール・デュボ（1968, 40頁）が言う時にも、より人間的な要素に迫っているとは言え、どこか物象化の眼差しが目につく。

環境とは、物や必需品の集積であろうか？『地球・環境に優しく』との標語であれ、エコロジー派や自然派の言動であれ、環境の彌縫策を超えての本質論とは思えない。

沢田允茂が『現代の生態学的危機の問題は近代ヨーロッパの根底をさぐり、近代的な文化の伝統の源泉に立戻って、人間が現在から未来にかけて直面するであろう環境にふさわしいような新しい文化の在り方を探究することを求めている』（1975, 19頁）と警鐘を鳴らす時に見ているものにこそ、環境の問題が潜んでいるのではないか、環境の未来に関することではないか、つまりは環境の直視ではないか、との直観を持ちつつ、まわりくどいが肝心な環境への思惟・思索を試みる。

環境を考えることは、人間を語るに似て、話しの始まりはどのようにも有り得ることの様に思える。それがもし、構造的に相即の事態やネットワーク・システムだとすれば、樹状システムが典型的に持つ序列の明解さを欠くのである。それだけに返って、同定の根拠

を、語る事態の声に細心の注意を払うことに置く以外にない。まずは、環境の通常の場合の意味を問うことから始めよう。

さて、では今、私が環境に想いを遣るに際して、何が導きの糸となり、何が拘束の条件であり、設定の目的の時空はどのへんに有るのか？人間の生物的能力・姿態でさえ、このまま続いて保持される保障はない。ましてや文化・文明は移ろうもの。

簡単である。遠い未来は、環境問題が危機を訴えている今、問題の外である。であるから、否応なく、人間の生存の危機に至るまでの未来、予料が利くところまでの時空の話である。環境の理念・未来を探る途上に在って、デモクラシーや資本主義的自由競争の社会が、原理的に人間の生の様式としてどれ程の真正さや権利を持っているのか、即断もできず、また残念ながらこの論を越えているが、根幹に関わるかも知れないものとの予感がする不安材料として、どうしても念頭を去らない。だがこの際、基本的人権、資本主義自由競争、民族自律、科学技術文明、大衆化、都市市民、等、現在の社会的アイテムは、例え、乗り越えなければならぬアイテムであれ、考慮の内に既知なるものと措定されている。そして、環境の根本を問う事を通じて環境問題に迫り、尚かつ環境デザインの可能地平を照らし出すことが、目論まれている。

§ II) 環境と世界

まずは環境の生成から環境問題の現在にいたる技術編年史的な F. Wagner の素描（1979）は、だれしもが理解可能な妥当な環境の総論である。この通常的な理解の上に、少々環境への詳論を進めてみたい。その際、環境と Umwelt（周囲世界：フッサール、オルテガ）とは同一視されている。

人間は大昔から自然への適合と同時に、理性と悟性（理性能力の操作的部分）を駆使して自然に介入出来た。『生活形態と道具を人間に調達してくれる精神的諸力が発展してきたにもかかわらず、人間はいかかわらず、思惟や意欲がかって捕らわれ拘束されてきた自然の一分肢でありつづけた——人間に前もってあたえられているこの世界と一致して、世界と同様、人間が手にいれた環境は具体的で、人間の力、眼、理性の射程距離内にあった。そして人間の手段は目的と意味とに対応してきたが、これら意味と目的は、たえずひとつの全体に関係づけられ曝されてきた人間存在全体が設定したものである』。この『人間と環境との基本的

関係は維持されつづけ、新しい形態が成立して古い形態にとって代わる』(ヴァーグナー 1979, 9~10頁) だけである。しかし、世界既存性は、ここでは、世界自体の完結の確立性と理解されるべきではなく、現象の中に既存の響きを持ちつつ自然・環境と同一地平に在ることと、そして、人間的手段(技術)は人間の目的と意味へ従属することに注目しなければならない。

我々は日常の生活世界で環境と世界との間の言葉の互換性の高さを知っている。ここで、いささか図式的過ぎて概念的に理解される危険を恐れるが、オルテガ・イ・ガセーの、ヴァグナーと同じ切断面についてのディスクールを引いてみる。学問的究明のほんの糸口に立つに過ぎないとも言えるオルテガの成果は、しかしそれでも、或るいは、それだから規範を無化した根源に立てたのだし、学問の為の学問の徹底的自己閉鎖の拘束を遙かに乗り越えてのドン・キ・ホーテの自由な蛮勇、透徹さが横溢する示唆の宝庫である。自分が、人間に現に在る生以外に、ネガティブなことのみを目にしつつ、輝きの生を窺うことも出来なかった時代に生きていたオルテガであってこそ、戻れた根源からの声であった。今の生が、彼の時代と同様に逼塞している時代のそれだからこそ、先学オルテガ・イ・ガセーに導かれての闡明は、オルテガに同一化することには、より人間的生の根源の層から論を展開しているオルテガの境位が、意義がある。

『われわれがその中で生きなければならない世界は、つねに二つの要素と器官を持っている。すなわちわれわれが注意を払って見る物と、それらが浮き出して見えるところの背景とである。(略)。こうした、背景、第二の層、範囲は、われわれが地平線 horizontes と呼ぶものである。(略)。地平線そのものも、われわれに見えるなにかであり、われわれに対してそこにあるもの、明らかなものであるが、……気づかれずに見られるものである。(略)。しかし地平線のその向こうには、いまはわれわれに現前していない世界の他の部分、われわれに対して隠れている部分があるのである』(オルテガ 1969, 85頁)。我々に見え、そこに広がる世界の部分、これが環境の謂いである。地続きの彼方へ伸展する天地の境、現前する人の界、直観的な自明な諸事物である認識の諸対象の背後世界、である。そしてそれを包む一切のものである世界が開けている。世界としての存在様態を表す両者は、単なる諸対象の具体的個別と同一のレベルの对象的処与ではなく

て、具体的個別的な諸対象への一回一回の志向を〈図〉として立ち上がらせることを可能にする背景としての、個別的具體性を越えた〈地〉としての超越論的地平であり、先行的・受動的に原一信憑されている開けの地平だと言うことである。

そして、世界の中には三つの面もしくは層がある。『すなわち第一の面にはわれわれの注意をひきつける物があり、第二の面には、そこから物が現れてくるころの視界の地平線があり、そして第三の面には現在は隠れているその向こうがある……。』(略) 周囲というのは、視界に広がる私の地平線が毎瞬間包含する世界の部分、したがって私に現前する世界の部分である。……(略)……周囲とは、われわれの回りにある明らかな、あるいは半ば明らかな世界である。しかしながら、われわれの世界は、このほかに、すなわち地平線のかなた、周囲世界のかなたに、……ひそみ隠れた見えない部分、われわれの周囲世界によってかくされ、しかもその周囲世界をつつみこんでいる巨大な部分があるのだ。(略)。しかしこうした潜在とぼかしの状態にあっても、……われわれの生にあって習慣性として働いているのである。地平線は、世界の現れた部分と隠れた部分との間の境界線なのだ』(オルテガ 1969, 86~87頁)。世界は、大空や大地や自然と同じく複数形の様態を思い描くことが不可能なように、ある無限の開け、唯一にして無二の広がり、それを更に包み込むものを絶対的非在にする絶対的な地平、である。

『想像的な思考であれ、知覚であれ、意志作用であれ、それらがわれわれのうちでばらばらな活動であるとは決して言えない。それは、われわれがつねに一つの特別な世界を構成し、そのなかで生きているからだ。習慣的にこの問題に関するあらゆる思弁の出発点となっている外的世界について言えば、この世界の物理-数学的局面のほかに、そこで、われわれが、身体的運動によっても、また魂の運動によっても、われわれの世界である一つの世界をつねに構成していることを忘れてはならない。……人間の固有性とはつねに世界のなかで自分に属する世界を構成することである……。……これといった目的もなしに前にあるものを眺めるときに、眼前に見出す視覚の領野……は、われわれの視覚の領野となって世界から離れながらも、世界の無限性のなかに、気づかないかたちでとり入れられてゆく。かくして、「一つの世界をもつ」とは、少なくとも「世界のなかにある」と同じく本質的であるように思われる』(ミンコフスキー 1983, 242頁)。

対象として世界に対峙している人にとり、その空間的無限性だけが世界性の核心をなすのではなく、現実の信憑としての世界の意味は、その意味の無限性に在る。つまり、捉え尽くすことの出来ない総体として、しかも既に何時も全ての現存在の現 (Da) を許容・支持するものとして、しかも常に新しい相を統べる予料・予想を超えたものとして、在る。人間の具体的なあれこれの志向性を超えた統合的なものへの志向のノエマの信憑であり、解釈の地平である。アインシュタインが示した宇宙世界の有限性は、人間の認識能力の限界性であって、過去の憧憬や畏怖の無限的延長の像(即ち世界像という住処)としての限定性の地平……地続きの彼方の地平……を許さないものであるが故に、住まい込む感情が宿るのを拒否し追放する。魂の予感世界像として結像できず、いつまでも思考されるものに止まる。^{イマゴ・ムンディ・ノヴァ}新しい世界像——^{イマゴ・スルタ}像なしてある (M. プーバー 1961, 38~39頁)。世界もまた人間にとっての意味であれば、つまり、生きる意味としては、表現の形が不可避なのである。

人間の表現行為は、例えば絵画・詩作は、処与性を越えて世界知覚に関わり、また人間の知覚はゲシタルトに組み込んで生の全体像を痕跡として世界に投入してきたのである (メルロ・ポンティー 1979, 88~101頁)。ハイデッガーの世界内存在のその世界であり、つまり、既にして予め私達とは独立無縁に出来上がっている容器存在ではなく、我々が知覚や行為を以てその構成に参与しつつ、それから逆に我々が構成されるような全体にして一なる開け、である。人間は常にそういう在り方で、つまり世界の元に、ある。

環境を〈図〉として見渡す為の〈地〉としての世界の素描は、これまでにして、更に論を進めよう。

§ III) 環境への志向

環境と言う言葉は、「明らかな、半ば明らかな第二の層としての周囲」の世界の部分を目指す方からして、曖昧と言うべきか開かれた概念を持っているであろうが、環境に纏わる根源に触れる意図から、環境の内在的意味の同定、又は、分別をすることが、更にはここでのその焦点を明瞭にすることが、必要であろう。

形式的な手順になり、生きたものに直接しない腑分けかもしれないが、ここで、環境という言葉の使用に少々触れてみることにする。

国語大辞典 (小学館) によると、『①周囲の境界。

まわり。②まわりの外界。まわりをとり囲んでいる事物。特に人間や動物をとりまき、それとある関係を持って、直接、間接の影響を与える外界。』とする。

また大辞林 (三省堂) では、『取り囲んでいる周りに何らかの作用を及ぼすもの。また、その外界の状態。』とある。

そして哲学辞典 (平凡社) は、『(抜粋) 生活体 organism が行動すべき場所の総体を意味する。……生活体を中心としてみると生活体の構造や機能の制約を受け、特有な内容を持つ。』と、より意味のレベルが明確になる。また、より詳細には、心理学辞典 (平凡社) には、『(抜粋) 広くは外部から生活体にはたつきかける物理科学的、生物学のおよび社会的な事象を総括していう』とある。

日常的な理解からすると、単なる物理的・事物的な世界だけでは無く、生体無しには無いものを少なくとも共に留意していると言えよう。「周りに」の様態がキーワードでありそうである。つまり生体や認識主体の関連で、大きく分けて二つの「周りに」の様態がある。(イ)人間である観察者が或る有機体の「周りに」の環境と認識・推定する場合と、(ロ)認識主体の人間が自分の「周りに」の環境と知覚・認識する場合である。

(イ)の環境は、植物・動物生態学や生物学が開いてくれた環境で、特に動物の知覚が「周りに」と生きているかどうかは、不可知であって、外部からの行動観察や物質の循環関係を介しての推定の域を出ようがない。樹木は幹の「周りに」に枝葉を広げているのか、飽食したライオンが近くの草食動物を「周りに」と見ているかは、分からない。人間が人間の解釈の図式として信憑しているのである。しかし、ユクスキュルのかしわの木を例にした種には種固有の環境世界があるとの説得 (1973, 124~131頁) は、理解可能で、より妥当な説明であろう。環境問題を射程にして環境に注目するとき、生物生態学的配慮を人間が必要とすることは有れ、逆のことではないので、ここではその限りでの(イ)の環境の思索に止める。

次に(ロ)の人間の環境である。ここでの環境は、環境に臨在する主体としての人間に関わる事象を意味志向しているがゆえに、人間や生の意味と同様に、還元論的な言い方をすれば複合概念であろうから、或る意味では曖昧なものに、言葉での説明では困難さを生む意味の集積になるであろう。言葉それ自身が、時間的で、分析的傾向にある独自の構造を持つが故に、その構造

の拘束を免れることができないからである。それでも「周りに」が、生きられる、または生きられるべき志向性であるから、論理的に更に三つの関係様態がある。

簡単に割り切って表現すれば、①物理客観的關係、②主観・客観的關係、③相即的關係、である。

いずれも、天体宇宙も、量子論の場合も、私の医療的肉体内部も、歯車の組み合わせ具合のギアボックスの内部も、無縁の関係であることは言うまでもない。即ち、意味地平の同定には、我々人間の直接の生への関与が働いているのである。

① 物理客観的關係

環境汚染の表現が、この関係を良く示している。それは、物理的事物の連鎖としての原因と結果の事態としての環境であり、背景としての無限市場・無限資源・無限時間・無限空間の社会的なレベルでの人間中心主義的なものの域を出ていない。「場所の総体」(前記：哲学辞典)としての環境の意味は、事物の集積とその入れ物のこの関係を単純に意味しているとは思えない。この関係では、総体と認める超越的眼差しが、局外から降ってきている。神の眼の様に……。言わば、前述の(イ)の環境と等位に在るもので、動物の代わりにヒトが、精々人間もどきが、中身なるものとして在る。人間全体の「周りに」と言うか、「混じりあって」の概念的な在り方である。そして、環境は、単なる包み紙や玩具箱の様なものにすぎず、中身と何の関係も結ばない何でも来いの容器の様に想定されている。思考するには可能かもしれないが、生きることが出来ない、了解の内に無い、認識不能なる視点である。経験で確かめることのない仮説的理念の表象的世界である。どこに帰属もしない遍在的相対的視点と物に特権なしの世界である。視点無しでもなく、どこにでも同時に有る視点でもなく、全体なるものに満ちる視点とも言おうか。しかし、全能ではなく、素粒子の像は見えない眼である。

生きる者も、生きる物も、命なき事物と、同一の権利で同一の地平＝環境の中に在る。原因も結果も関係も、その同一の地平に立つ。そこには、生きる世界なく、地平なく、今(いま)性なく、上下なく、左右なく、眺望なく、遠近なく、分節なく、内外なく、奥行きも幅さも無く、スケール無く、味なく、匂いなく、機械的時間と運動が占める。だが、あくまで暗くない眼が、遍く見通す統べる眼が、外からそこを眺めてい

る。

② 主観客観關係

人間が動物の様な環境と癒着した機械的存在や即自的な刺激・反応体(と推定される)ではなくて、対自と対他とを生きることが出来る現存在であるということは、身体の中心化能力に支配し尽くされているばかりではなくて、超越能力としての脱中心化能力を発揮できることを意味している。鏡に面する私、奥行きを側からの幅と見る私、模型に生きる私、小説を読む私、どのように……。『われ感覚す、故に、我在り』から『われ思惟す、ゆえに、われあり』への道程のいずれかに、われは何時もある。そして、その極致が科学する眼である。

専ら思惟・知覚する主観は、現在、皮膚の内なるエゴの姿をして自らの内に閉ざされた自己完結的な感性でしかなく、その閉ざされた感性の投企と言う見事に首尾一貫したした既存の感情の一方的な感情移入による他の存在への自己同一化が精々の、言わば〈根無し草〉の危機を胚胎している。構造的に、マスに漂う大衆(オルテガ 1985、特に144～163頁)の境位と同じ主観であろう。自分の意志と嗜好の自由を、恣意的に抑制なく利用できる人間だと思込んでいる。他の我さえも客体と見做している眼である。だから他者と共に在る生の中で不満と失望に直結する一種の精神的奇形の境位である。

『科学は物を巧みに操作するが、物に住みつ়くことは断念している。科学は物の内在的 [= 観念的] モデルを作り上げ、そしてその指数とか変数に、それらの定義から許される範囲の変換操作を加えるだけであって、現実の世界とはほんの時たましか顔を合わせない。科学とはこの見とれるほど活動的で、器用で、割り切った思考であり、全存在を「対象一般」として、つまりわれわれにとっては無に等しいものでありながら、やはり同時にわれわれの人為的技巧に合わせて作られているとでもいうかのように扱おうとする態度のことである。そしてまた、科学はいつもそうしたものであり続けた』(メルロ・ポンティエー 1966、253頁)。

ここで環境は、主体的に(生物的にも)生きられた意味として現れるものから距離を取り、素朴唯物論的に、また現在の科学実証主義・科学的還元論に、ただの客体として観照的形式になり、そして、ここでの「周囲に」とは、第三者が観照的に等価の二者の関係を眺める内-外(囲まれるもの-囲むもの)となり、本来が感性的了解の地平の二者の直接関係のそれは、現象

していない。それは、合理主義的な世界の自己完結性と自足性の鋳型に、人間でさえも閉じ込めることが出来て、全ては理性的解釈・説明で尽くせると安心している虚構世界である。現実世界をそれで解釈することは、怠惰な単純な貧しいものとなる。ところが、この「周囲に」を、文字どおり図式的に人の周囲と解して環境（即、自然であり、エコロジカルなシステムと種も）を対置して還元論を試みるパラダイムに、環境問題の環境は集中する。開かれて豊饒な環境を、その構図では捕らえ切れない。「周囲に」の“囲む”は、まさに主体にとっての空間的実感としての動詞的なそれとして解されなければならない。そこにこそ、環境の本質論と環境問題の視座との環境に関する乖離があるし、懸隔がある。物理的にはそこに居ながら、恣意的に眺めるだけのクールな眼、住まい込んで居ない科学の眼は、カメラの眼、テープレコーダーの耳として、物理的可視不可視の配置の世界を捕らえる。解釈は、後からやって来て、付加される。価値・意味が不在の世界である。

誰のものでもない、また誰のものでもありうる虚構の響きの経験で、それはあろう。明晰な主題化の一義的眼ではあろうが、世界と生の多義の一義化・貧困化ともなろう。時は、気配や未知を胚胎することなく現在と等価の顔付きをして、只、動いていく。未来は必然的に、未だ充実せざる現在として、今だ手元にない今日として、既視的時間であり、其処は、十全にもう既に此処である其処として、予料・予測で十分の外挿法的延長にある。この科学的・合理的認識のイメージは隅々から奥底まで浸透して、未知なるものの全てを破壊し尽くして、それらを、誰にでも容易に予見可能な合理性の地平に、奥行きを失ったたった一つの地平に、置換・展開している。丁度、推理小説の結果を知って後、読み始める人の様に、私は来るべき時を全て知っている、と言う感情（確実で安心した感情）で未来が出現し、未来が本格的にその基盤に胚胎している未知なるものを振り捨てて出現する場合、我々には、最早、未来は未だ来らざるものではなく、既に知られた追認の現在である。未知の時間の開けである未来の、その生命の泉の枯渇であり、万有の基盤の喪失、時間の死であり、不動の時空である。生命の泉が、合理的諸因子により埋め尽くされ、踏み固められたかって来た地平に成り代わっている。外部世界を対象化し、道具的に操作する「運動の論理」（藤沢令夫 1980, 183～191頁）の世界である。

何の生命の息吹も無い時空に、生命の躍動、感動、

感激、失意、驚愕の生まれる余地は無い。未来の喪失は現在の死でもある。生と生成の豊かさの死である。未来、選択の決意、創造性は、ここには出現しない。

だが、環境は実用のみを対象世界ではない。人間に奉仕する有用物の格納庫だけではないのである。

④ 相即の関係：生きられる環境

視点は生きている。「場所の総体」に確実に具体的に参加し組み込まれている視点存在であり、心身の合一なるもの、私である。

いまに有限、ここに有限、一人称（固有の誰か）に有限にして、なおかつ開かれている有限者の視点（身体の両義性）に常に付き纏うもの。世界、環境、地平、時間、空間とその分節、パースペクティブ、奥行きと幅、充実と空虚、対自と対他、スケール、質と気分、未来・現在・過去と行為、等が、意味で現象する。現実の物の意味、環境の分節化、主観の視点とは一つの事態（時空）であり、相即の事態である。

いま・ここ・わたしの現実化である身体の両義的能力を、視点・パースペクティブは充実する。主観客観の未分化の状況では十全に、明晰な意識の時では潜勢的に、その能力は働いている。身体は、あくまで、精神（心）と肉体との二項位位とは無縁の、世界に住み、自ら意味の開示に向かう志向的存在を、生命力の源としての存在を、しかも明瞭な意識以前の意思の源泉（例えばニーチェの力への意思、オルテガの根本實在）に在ることを指している。あれこれと指示できる實在の物性（空間を占有する肉体）をも發現するし、その物性を超越をして自ら意味を發現し行為する主体そのものでもある。現象としての現れでは、内在性と外在性との間の位置を決定論的に外部から限界付けられる不動の静的な存在ではなく、一回一回の現（いま・ここ）を生きる現存在の母体であると同時に、他に関わって自己を同定する開かれた存在様態をしている。

主観である響き・彩りは、この身体を具備した主体としてのいま・ここへの拘束を、あるいは強くあるいは弱く、生きている。世界はその主体を中心にした物の意味の布置関係として現れる。身体が世界に住み着いている限り、そこで物は、単なる眺められ選択されることを待ち受けているだけの対象としての存在者ではなく、私に自己を表現してくるものでもある。世界・物は私によって〈身分け〉（市川浩 1978, 146～150頁）されるし、私は世界・物によって〈身分け〉されている。現実の行為・知覚を生きる私は、一回一回の

場に応じた自己の拡張を生きて居る。盲人は杖先まで肉化して杖の握りを意識せず、投手は捕手のミットまで球で素描し球より先に到達し、球を放す手に志向せず。物の傍らに、環境の内に臨在する。行動の地平は常に確定している。安定していなければ行動は滞る。しかし、人間は地平の変換（つまり、図地関係や部分全体連関の選択）をすることが出来る。いつも根源的生の感情に投錨されながら、ではあるが……。

§ IV) 生きられる環境と主体性

現在、環境を語るときに陥りがちな誤りは、簡潔視のために③の環境の意味の豊かさを切り捨てて、①と②の環境での主知主義的人間の在り方に、検討の地平を当然のことの様に限る態度である。

環境・ものと人との関係、人と人との関係に際して、観察者の傍観している立場に身を置くことは、自発的行動としての行為、遊戯、創造的場から、その生の本質の意味から、離れていることになることは、幾多の現象学の知見が伝えてくれているものである。

そして、そこで得られる傍観者としての観察（これを巷間、俗的な意味で「客観」視と言っている。）は、行為、遊戯、創造、環境の質的内容もそれ自身と言える全体の何物も表現しない。痛みは痛むその事（痛み）であって、痛む姿やその結果の代理的何物かではない。同時発生の人間的事象が、常に因果関係に結ばれているとは限らないものである。事象の意味の前後関係（意味の上部構造・下部構造）を解釈の図式の内に直視してこそ因と果は解釈として生成する。つまり、真に実感すると言えるのである。

論理には、厳密な本質学としての心理の記述妥当性に関わる論理と、本質的に無関係な現象・概念の間を利用可能性で関連づけた論理とがある。

例えば、視覚神経生理学がどのような仮説の上に築かれるかは、眼や視神経の病理の治療への適不適の結果が決め手である。化学的、電氣的、機械的などのそこでのプロセスと、その結果での可視・不可視との対照関係に注目した実践手続きである。そこには既にして予め“見る”ことそのものは当然のことと了解されている（公理とでも言える）前提である。決して“見る”ことそのものの説明（視覚論）には至らないものである。“見えている”ことは“見る”ことそのもののうちに在る何かであって、視覚神経生理そのものの根拠であり出発点である。公理を使って、その公理の内容を説明・証明する実学は矛盾である。

例えばまた、物の理を追求する物理学の歴史上、否定されたはずのニュートン物理学体系に属する力学が、依然として工学の分野で生き続けているのは、その論理が物の理の説明として妥当性の命脈を保持している理由からではなくて、工学材料の様態に大略添うパラダイムとして使えるだけの根拠からである。航海術として、人工衛星ナビゲーションシステムを使おうが、天体を頼ろうが、陸地を頼りに沿岸航法を取ろうが、勝手であると同様である。真も偽も無い、有効に目的地に到達する可能性に過不足なければ、それで十分に根拠が在るだけのこと。

その便宜的に利用しているだけのパラダイムをあたかも適応している領野の真の姿・真実の説明の論理と取り違えるところに、過誤が生じるのである。特に、科学的理論が現実の生の世界の説明可能と過信し始めたモダニズムの傲慢が、この世を貧困化した大きな原因をなしていることは疑いえない。

環境に関しても同じ事が言える。環境の存在様態に妥当な思考法（つまりは結句、環境とは何かを問う態度）とは別に、他の地平への適応可能性、利用可能性での環境技術論もまた在り得るのである。それは、意味生成のプロセスの妥当性とは関係なくても、環境問題の解決に使える有効な技術の論理であり、結局は解決処理に使えるかどうかの結果論のものである。この技術は、必ずしも環境学の構成要素をなす必要のない、他の領域（例えば工学）のものであろう。無いよりは有ったほうが良い技術と位置付けられても良からう。丁度、寿司屋の親父が職業上良い米を選ぶ知識を不可避とするが、良い米を作る技術は不必要である。が、知っていることは知らないよりは良いことは、当然の事、の様に……。

『……根本実在としての人間の生から出発することにより、（略）人と世界が生において同じく実在のものであり、どちらが先だともいえないことに思い至るのである。世界とは要件や必要事のもつれであり、その中に人間は、好むと好まざるとにかかわらず織りこまれていく。（略）世界もしくは環境は、それゆえ巨大な実用的もしくは実践的実在である……。つまり物（それ自体その内部に自己の存在を持っているものすべて）より構成されている実在ではない……。』(略)。事実それらは、私に役立つ道具、器具、家具、手段である。（略）ときには、むしろそれらはあらゆる実用的実在の結果たる邪魔者、不足、さしさわりの、限界、欠乏、失策、妨害、危険、障害、故障である。……厳

密な意味で *sensu stricto* 「物」という存在は、その後には生じる二義的ななにか』(オルテガ 1969, 79~80頁)であることを忘れてはならない。

われわれが現在、環境問題を知っていながら、直面しているとは言えない状況こそが、この問題解決の未来を負っている。

科学、概念、認識の種々のものが渾然とわれわれの一般の態度の内に混入して、それら相互の位相が曖昧に成っている現状において、迂遠であるかも知れないが、環境の危機の回避への出口ともなるものが、人間の生を直視することで、ほの見えないものかと考える。あくまで、この際のキーワードは、「生」、そしてほかならぬ「人間の生」以外の何物でもない。既述のように、環境問題は人間としての生存の謂いであるからである。「生」とは、ある面では「性」としても顔をだすが、生命の躍動なる現象にそれを見る。

それ故に本質的に未来を、過去から汲取った認識の直線的・外挿法的な延長である表象としてではなく、現象としての未来を、本来の未来を孕んでいる。

このことは、科学的野蛮とそれによる技術と進歩から、本当の生の躍動、生の律動、生きられる時間の回復・復権に意を用いる必要が今あることを、言っているつもりである(ミンコフスキー 1972, 1~13頁)。

これまでのところから意味内容の必然からではなく、形式的なずれにのみ注目してでも、いわゆる環境問題を言い立てることは、意図の外ではあろうが、畢竟、環境イデア——最適環境(アメリカ計画家協会) etc——への志向なき社会の、特に狭義のプラグマティズムのみが生きている社会の症候群を指向していることに成っている。環境問題の解決技術は、今、必須で危急のものであることは論を待たない。しかしそのみの志向は、この大衆社会・近代社会の主体の志向からして、即、形を変えた問題の先送りになる。身近なことに超越の世界観を含まない生の関心事のあれこれの積み上げに、生活が有る、とするこの社会の生活パラダイムの、当然の帰結が見えてくる。だが、肝心なことを忘れて居る。たとえ生物学的種として生き延びられるとしても、その間でも、人はヒトで在るだけで在り得るわけでない。常に人間以外のものでは在り得ることが出来ないのである。丁度、教育の何たるかを不問にして、数学や歴史などの個別的知識を詰め込むことのみ専心しているかの如き今日的な教育機関

が陥った、魂なき教育の状況が教えてくれることに、酷似してはいないか？

その際に、私の(民族の)環境と種の(生物生態学の)環境との、区別と統合とが問題となろう。ルネ・ジュール・デュボは、人口爆発と都市化の傾きに未来を見ている(1968, 38~40頁)。即ち、そこにこそ、環境問題の根源が在るとの謂いであろう。しかし、人口問題と脅威的な技術発展が契機になっての迫っている環境の危機は、案外、種の生命的危機よりは、人間的価値の危機の方が、危急のものかも知れない。アウシュヴィッツにも奴隷にも社会は在った、とは行かないのではないか？ 人間は適応の動物でもあるので、止めどなく墜ちつつ生物的に生き残ることも有るのである。私はそれを人間とは呼ばない。

§ V) 終りに代えて……表現に向けて……

物・知識・技術・シェーマなどを少しづつ増やしてきて至った確実に豊穡の時代に、何とはなしの貧しく寂しい世界に、何故？と問う現時点。科学技術の据傲性も功利的職業文化の暴走も在ろうが、それだけではなく、生命感の萎縮・衰弱・没落(デガージュマン)の傾き……慢性病、人間的価値の退廃はその症候群とか……や、憧憬・願望(アンガージュマン)の泉の枯渴こそが問題なのではないか？ 技術・もの・ことの発展が、“私の”発展・進化・成熟では無いからであろう。社会のあちこちに人間理解の場が要ることの謂いではなからうか？ 表現に至らない、つまり生きない意味に関する何等かのものに、問題があるのではなからうか？

生きた時、生きた未来、有機的時間の再生と環境の人間化は、相即の事態である。この事は、決して後退でも先祖帰りでもないものを意図しており、科学を知ったわれわれの世代は、その科学が新しい物的・技術的豊かさを付け加えている限りでの生活であり、科学を受容したが故の生の退廃・退嬰であってはならない決意である。車を得た事が自らの足で歩むことの充実の欠如と変えたり、ヴァーチャル・リアリティーが実態の信憑に成り代われば、我々の環境は豊かに成ったとは言えない。在るもの(自然)と、作り出すもの(表現、デザイン)との、豊かなシンフォニーを環境構造とする。越えられないもの(自然)を直視し、“不条理も当然の権利として在る”ことを知る。科学化されたもの、今だ科学化されていないもの、本来科学が

届かないもの、の位相を知る。科学は、生の最中の人間を援助する能力を胚胎しているが、科学技術は手段の体系に専心するが故に、本性、生の目的・価値・意味を生成しはしない。

環境も世界も、その在り様は、人間の生の在り様の対照的な対象での対応に他ならないが故に、自己の生を根底的にこの現実世界から開放し、生の豊穡化を通じて、世界の、環境の開放と豊穡化を達成せねばならない。しかも梅原猛（1993年）が示唆することは決定的であって、その転機が、かつてモダニズムが達成した「豊かに物があふれる豊かな時代」の基底に優れて隠れて在ったデカルト主義的世界観と同様に、無理無く隠れた姿で成され得るかに係っている。生の新しい原理、つまり環境の原理の樹立は急務である。原理は、そして表現は、現実として生きなければならない。環境の危機は、同時に相即的に、低次元化しつつある生き方……快感と享受に根拠を置くもの……への慣れや、偽の生への鈍感さ……無責任大衆化……が、徒に、高度の美德の能力……意志、選択、決意で未来に自己を投企すること……も失わせつつあることではないか。即ち、環境の豊かさを感じ取る能力でもあるものを衰弱させている。

近代そのものである『経済の合理的かつ計算的思考は、科学と技術の合理的かつ算術的思考といたるところで結びつき、自然と人間の全体から思考が分離されることによってのみ、自然の諸力の機能的法則を発見し利用することに役立つ。この思考は、自然と人間の全体領域に対する帰結を、問題とすることすらない。

(中略)。分業的な経済世界と科学世界を区画化する思考が見渡しうるのは部分領域と短い射程距離のみであり、……、自然は、それ自身にあてはまる現象としては、すなわち環境としては視界から消えうせてしまい、その代わりに要素として現われ、かつ利用されたのであり、それゆえ、土地、水、空気といった基本的生命基礎を「環境」と奇妙に同一視する傾向が、この領域において新たな決議論をつくりだすような仕方で現われてきた』とF. ヴァーグナー（1979）が正鵠を射て注意を喚起するように、環境問題では、「環境」と「自然」への眼が脱落する。見据えないものに、解決の糸口はない。

環境の我々との在り様、どちらもが本性的存在様態……現存在と地平存在……を失うことなき在り様をし

ながら、環境問題をそのそこに位置付けることが重要であることが分かってくる。特に、単なる傍観視の対象としてのそれではなくて、各人の我が身の『周囲に』在る“もの・こと”として、位置付けることの重要さが浮かび上がってくる。もの・ことは、物体や表現を介して自己を顕にする物である。ホメロスは羊皮紙に書き付けられる事で、タブーは法律に成文化されることで、環境内存在化する。人間が人間となって以来いつも、表現をすることで環境を造出してきたし、これからもし続ける以外に無い。

我が“ここ”や“そこ”に出現する環境問題は、直接、我が身の生の衝動に支障をもたらして、具体的に訴えてくるネガティブな価値が、顕に常にわれわれの未来に立ち塞がる。それを傍観するのは、愚者のみである。ありありとした危険を回避できない、関知できない状況は、極めて特殊な歴史……ナチスの絶滅収容所やカンボジャでの大虐殺など……以外では考えられない。われわれの全てが、この意識状況に在ると、言い得る者は居ないであろう。今の毎日の生がどうであれ、まだわれわれは、われわれに降り懸かる難題に立ち向かう自律と意志は持ち得ている。環境問題の問題性はここには無い。無いと言うよりは、例えばアフリカ、中南米などの低開発国では、日々の生活の目の前の社会の混乱・危機……飢餓、失業、疾病、など個々人の実存の危機……が環境問題を隠している。身の近くに在るもの・ことが、より離れたもの・ことを覆い隠すのは、生体の生活世界のパースペクティブからして当然の現れである。現在の環境問題は、一言で言えば、わが環境の地平線の外の地球環境問題であり、殆ど都市人であるわれわれ世代にとっては、生活環境のここ・そこへの自然環境問題であり、遙かに離れた、環境圏外の出来事の響きなのであろう。それは、環境内に表現を持ち得ない地平……ここ、そこ、あそこ、でもない……、縁の無い所、さらに場所さえ定かでないようなどこにも無いところ、のものとの在る（つまり、無い）のであろう。

環境とは、人間がありありとした現前としてではないが、共一現前するものとして共有して思い描く（または投企している）もので、メタファー（隠喩）でも、夢想の開現でもない生き生きとした現実に通底する空間である。純粋に観照的な態度のもとでの跳躍はない。場面の変転はありえても、地平の断絶はない。地続きの生活に関わるが、功利的・実用的・人間的意味のもの。だが、利用可能な道具的・手段的な意味にのみ満

ちた集積ではなく、自分の足で一步一步進む、知覚的
 感触に裏打ちされた道程と光に満ちたものであって、
 直接的なるもの、間接的なるもの、そして地平的なる
 もの……と言う構造化された死活の周囲を出ることは
 ない。

倫理（ヨーロッパの神の前の人間像）や道徳（共同
 監視の眼）の法律化・規範化だけでは社会・個人は萎
 縮する。止めどなく通俗に墜しつつある自由主義や、
 隷属（と、その結果の沈滞）への道に繋がった社会主
 義計画社会……例えば、過去の東独経済に見られる生
 命感の欠如による崩壊……を見ると、歓迎すべき進化
 ・発展は、設計・計画されざる創造的変化に支えられ
 るべきであろう。つまり、自由経済社会の健全な姿は、
 たとえ良い意味でも単なる勤勉・努力・競争といった
 生真面目でむき出しの価値だけではなく、企画開発力
 ・チャレンジ精神・冒険心という、進歩・発達と同根
 の創造性に関わっていないと、活性化しないものであ
 ろう。創造性、個性ある成熟、変化と成長と言う意味
 での成長・発展は、生きられる意味の差異性の源とし
 て、個人の自律と共同存在性、確信と伝統、非日常と
 日常、などを支え、表現を求める。そしてその限りで
 の sustainable な進歩・発展とは、どの様に可能か、
 こそが問われるべきである。

しかし、崇高や高貴を排除して至ったこの大衆化社
 会で、美と愛から離れた合理・効率をひたすら追い求
 める大衆社会で、怠惰な快適を享受しようと待ち構え
 ているだけの圧倒的な大衆で、本当の意味での自由を
 支える多様性と選択・決断は、どのように可能であろ
 うか？ 結果的に人口爆発抑制に繋がる家庭像・人間
 像、個人の成熟を進歩・発展と実感する共同社会・住
 環境、社会の発展・進歩を具現化出来る環境コンテキ
 スト（しかも結果、資源に強く依存しないもの）がキー
 ポイントとすれば、環境の多義性が重大なテーマにな
 ってこよう。

結句、少なくとも、経済や企業や役所や専門家らの
 主導契機による今のモダニズム世界観から、どうしても
 も生活者、市民、つまりは我々全ての者が帯同する処
 世観へと変えねばならないことを意味している。市民
 主導の方が実効があるとか、倫理的、本質的にそうす
 べきであるとか、どちらかといえばそのほうがいいと

か、の問題を越えて、それ以外に生存の可能性は無い
 との不可避的な事態……ライフスタイルの変更であ
 り、世界観・自然観の変換であろう……と言うべきも
 のであろう。その有力なイメージの一つに、モダニズ
 ムが描いていたスタティックな予定調和的世界像から
 離脱して、自然生態系に近いダイナミックな環境系を
 考える事ができる。しかし、その成立の可否はひとえ
 に人間の環境たりえるかどうか、表現に至れるか、に
 係って居る。生物としての生存は決して人間としての
 生存ではないからである。

論の対象としての環境は、それ特有の存在様態から
 して、記述的には様々の切断面をそなえていて、要領
 よく纏められれば纏めるほどその豊穡を失うのは、避
 け得ない。この後、環境の未来に関して、デザイン・
 表現の切断面で思考される予定である。

文 献

- ルネ・ジュール・デュボ： “適応する人間” (W. R.
 イーウォルド編：人間環境の未来像)，鹿島出版
 会 1968年
 沢田允茂： “人間と環境”，講座・現代の人間学 9～
 46頁，白水社 1979
 オルテガ・イ・ガセー： “個人と社会”，オルテガ著
 作集 5，白水社 1969年
 ——： “大衆の反逆”，白水社 1985年
 E. ミンコフスキー： “精神のコスモロジーへ”，人文
 書院 1983年
 ——： “生きられる時間 1”，みすず書房
 1972年
 M. ブーバー： “人間とは何か”，理想社 1961年
 M. メルロ・ポンティエー： “世界の散文”，みすず書房
 1979年
 ——： “眼と精神”，みすず書房 1966年
 J. フォン・ユクスキュル： “生物から見た世界” 124
 ～131頁，思索社 1973年
 藤沢令夫： “ギリシャ哲学と現代”，岩波新書 1980
 年
 市川 浩： “〈身〉の構造”，弘文堂 1978年
 梅原 猛： “モダニズム信仰”，朝日新聞 1993年 6
 月13日号